



第2回 東京家事調停協会と 弁護士会との意見交換会

【家事法制に関する委員会 副委員長】
中本 有香 Nakamoto Yuka(61期)

2023年6月1日午後4時より午後6時まで、弁護士会館において、第2回東京家事調停協会と弁護士会との意見交換会が開催されました。

意見交換会の開催趣旨と参加者について

本会の開催趣旨は、家事調停事件に関し、手続代理人となる弁護士と、家事調停委員との情報交換により、認識を共有し、相互理解を深め、家事調停のより良い運用を目指すことにあります。東京家事調停協会と弁護士会との意見交換会は、今回が昨年に続き第2回の開催となり、弁護士会より19名(東弁、一弁の会員を含む)、家事調停協会より16名の調停委員が参加しました。

意見交換のテーマについて

本会においては、まず、前半の70分間で、調停委員2~3名、弁護士3名から構成される6組のグループに分かれ、グループ討論を行いました。本年は大きなテーマを「夫婦関係調整(離婚)調停」とし、以下の3つの小テーマについて意見を交わしました。

- 1 調停をするにあたり考えていること、感じている傾向
- 2 調停委員から弁護士に対し、または弁護士から調停委員に対し、日頃感じていること、聞いてみたいこと
- 3 より良い調停のために(工夫や課題、調停全般について思うこと)

後半(45分間)のグループごとの発表において、各テーマごとに次のような意見が出ておりましたので、ご紹介させていただきます。

テーマ 1 「調停をするにあたり考えていること」「感じている傾向」

【調停をするにあたり考えていること】

- ・調停委員は、調停で解決することで、当事者にとっ

てより良い再出発になるようにと考えている。

- ・結果で満足できないことがあったとしても、どこかで納得感が得られることがあるようにしたい。
- ・もともとコミュニケーションが苦手な人々が調停の当事者となっていることも多く、当事者同士にコミュニケーションを取らせていくのが調停のプロセスでもある。
- ・調停においてある程度時間が経過することによって問題が解決していくということもある。
- ・当事者が気付いていないポイントを引き出すことが解決につながることもある。
- ・双方が感情的になっており協議が困難な状況において、裁判所の基準に当てはめて解決できるという点で、調停という制度は有効。もっと調停の有効性・重要性を広く認識してもらう必要がある。
- ・調停委員の公平性を強く意識している。両当事者に同じような態度と発言を心掛けないと調停はまともでないのではないか(調停委員)。一方で、中立に徹しようとするあまり、当事者から見て冷たく感じたり、事案を本当に把握しているのか疑問に感じたりするときもある。こういった事情があること、こういった主張をされていることはよく分かっていると言及してもらうこと等で、もう少し当事者に寄り添った姿勢を見せてくれるとよい(弁護士)。

【感じている傾向】

- ・コロナ禍以降、精神面で傷ついている人が多いと感じている。
- ・DV、モラハラも増えている。一方で、DV、モラハラについての世間の理解も進んできている。
- ・感情が対立しやすい事件の類型として、最終的に経済事件の側面を持っていることが多い。
- ・女性の働き方がこの十数年で変わってきており、経済力を持っている女性も増えている。女性の不貞が主張されるケースも増えている。家族自体の多様化が見られる。
- ・離婚事由がはっきりしないケースも増えている。
- ・発達障害等の障害を抱えている当事者も増えている。

テーマ 2 「相手に対し、日頃感じていること、聞いてみたいこと」

【調停委員から弁護士に対して】

- ・調停までに当事者と代理人はどのくらい話をしてい

るのか。当事者と代理人の関係が希薄化しているケースもあるのでは。

- ・裁判所の書式を使わない代理人がいるが、調停委員としては、どこに何が書かれているか把握しやすく漏れないとの理由から、裁判所の書式を使してほしい。
- ・代理人が調停委員に攻撃的なケースは、依頼者のためのパフォーマンスなのか本気なのか分からないことがある(弁護士が当事者化している傾向がある)。
- ・勝ちにこだわる(面会の回数等)代理人がいるが、勝ちにこだわり過ぎていて感じることもある。
- ・期日間で調整ができる代理人と、全く調整がない代理人がいるがどうか。書面の提出期限が守られないなど、期日間の準備が適切に行われず、期日が空転してしまうことも多い。書面を提出しないのは作戦か。

→耳の痛い話である。一方で、当事者によって調整の可否や難易が異なることもある。

- ・すぐに審判移行してほしい、不成立にしてほしいと主張する代理人がいるが、これはどうか。費用面の問題等があるのか。
- 待ち時間が多く効率が悪いという時間の面で、そう主張する代理人が多いのではないか。
- ・相手の立場を理解しつつ、自身の依頼者の意見や主張を整理してくれる代理人はありがたい。
- ・調停委員と裁判官に対する態度が異なる代理人がいる。
- ・提出書面は短くポイントを簡潔にまとめていただけるとありがたい。

【弁護士から調停委員に対して】

- ・調停期日の間隔がかなり空いてしまうことが多い。何とかならないか。
- 急ぐ事情などを具体的に伝えてもらえれば、工夫できることもある。
- ・感情的になりがちな当事者に対しては代理人としても説得に苦労しているので、調停委員も寄り添ってくれているということを態度や言葉でもう少し示してもらえると事件が収束しやすくなる。
- ・まれに調停委員同士の関係が険悪な場面を見かけるが、相調停委員(以下「相調」)さんとの役割分担はどのように決めているのか。
- 相調さんの様子を見ながらあうんの呼吸で探り探りやっていくケースが多いが、相調さんとの歩調合わせは苦労することもある。第1回調停前には事

件の見立てを共有するようにしている。

- ・裁判官に対する要望として、手続の早めの段階で進行や決着の方向性が示されると争点が絞られ、解決が早いのではないか。この点について調停委員と共通の要望として裁判所に伝えられればよいのではないか。
- ・面会交流を求める側の代理人として、調停委員からももう少し監護親を説得してもらえればよいと感じることがある。
- 調停委員として説得の必要性を理解していても、当事者や事案によっては、慎重に進めなければいけないケースもある。

テーマ 3

「より良い調停のために」

- ・「良い調停」とは、誰かに決められた、仕方なく譲ったと感じて終わるものではなく、自分がこう決めたと納得できる調停ではないか。納得して決めると、その後の当事者の人生の進み方にとっても良い影響を与えることが多いので、その視点をもって調停を運営するとよいのではないか。
- ・納得のポイントは人によって異なるので、納得のポイントがその当事者にとってどこにあるのか(親権なのか、面会交流なのか、お金なのか)を早い段階で把握して、解決の着地点のイメージを調停委員と代理人で共有できると、進む方向が明確になる。
- ・調停はチームワークであり、調停委員、代理人、裁判官、調査官が信頼し合いチームになった場合、良い調停となり、良い解決になる。

継続的な意見交換会の実施を目指して

前記のような意見があり、グループ討論は各グループそれぞれ大変盛り上がり、活発な意見交換がなされました。調停委員からも、弁護士からも、大変有意義な時間であり、この機会を今回参加していない調停委員や弁護士にも広めたいという感想が多くありました。

試験的な開催であった昨年に比して、参加人数も多くなり、大変な盛会となりました。協議会の後の懇親会も、忌憚のない意見交換が続き、楽しい時間となりました。

調停委員と弁護士の相互理解を深め、より良い家事調停の実施を目指すため、今後も継続的に意見交換会を実施したいと考えています。

